

ディアスポラ・エージェント研究  
——オーストラリアにおけるブラジル映画祭主催者の事例——  
白水 繁彦<sup>※</sup>

A Study of Diaspora-agent  
—A Case of the Promoter of the Brazil Film Festival in Australia —

Shigehiko Shiramizu, Ph.D.

**Keyword:** ディアスポラ・エージェント、ディアスポラ意識、マージナルな存在、在豪ブラジル人、ブラジル映画祭、ディアスポラ・エージェントの類型化

## 1. 研究の課題

本稿は、エスニック・コミュニティの文化変容を発動または主動する主体すなわちエスニック・エージェントのあり方について研究してきた筆者の仕事の一部である<sup>1</sup>。今回取り上げるのはエスニック・エージェントの一種（下位概念）であるディアスポラ・エージェントの事例研究である。筆者の問題意識は、人はどのような経緯でディアスポラ・エージェントになるのか、ディアスポラ・エージェントはどのような活動をするのか、なぜクニを出るのか、出たクニ（出自国）にどのような思いを抱くのか、受け入れ社会（ホスト社会）とどのような関係を取り結ぶのか、といったことからである。

今回研究対象とするのはオーストラリア在住のブラジル人（在豪ブラジル人）ディアスポラ・エージェントである。本研究は科研費等の助成によってアンジェロ・イシを代表として行ってきた在外ブラジル人のメディア生産とメディア利用に関する研究の一部である<sup>2</sup>。

本稿の課題は、ある在豪ディアスポラ・エージェントの語りを通して、ディアスポラ・エージェントの生成とディアスポラ意識の実態に接近し、ディアスポラ・エージェントの類型化に資することである。

## 2. 主要概念の整理

ディアスポラ・エージェントとはディアスポラ意識に基づき、出自社会の文化を、同胞およびホスト社会の人びとに広めるべく活動するプロフェッショナルもしくはボランティアである。それとよく似た概念であるエスニック・リーダーとの違いは「リーダー」が所属集団内外の一定数の支持

---

<sup>※</sup> 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

<sup>1</sup> エスニック・リーダー、エスニック・エージェント関連の研究は参考文献の白水繁彦の著作を参照されたい。

<sup>2</sup> この研究は以下の助成を受けている。記して感謝したい。「移民のメディア生産とメディア利用に関する国際比較-在外ブラジル人と在伯日系人」科研費助成、平成25年～27年（代表：アンジェロ・イシ武蔵大学教授）、および、武蔵大学総合研究所研究助成、平成26年～28年（代表：アンジェロ・イシ武蔵大学教授）

者を必要とし、他者から認められるいわば他者規定の部分の有するのに対し、エージェントの場合は必ずしもリーダーである必要がない点である。ディアスポラ・エージェントの「エージェント」は、エージェンシー（ミッションを与える機関）からの命による場合はもちろん、自らにミッションを課す場合も、自分はこのミッションを担う主体であるという、いわば自己規定によって活動することが多い。

ディアスポラ意識とは他国への移住者またはその子孫によって出自国およびホスト社会との関係をとおして形成される出自国に対する個人や集団の感情および自覚である。ホスト社会とは移住者の受け入れ側の社会である。移住者はホスト社会が形成する社会環境に適応を迫られるのが一般的であり、ホスト社会がしばしば主流社会やマジョリティと互換的に使われることがあることからわかるように、場合によっては移住者に対し意識的・無意識的に同化を迫る人びとの集合体である。

ディアスポラ・エージェントとよく似た概念にエスニック・エージェントがある。その関係は、前述のように、エスニック・エージェントはディアスポラ・エージェントの上位概念である。その違いは、エスニック・エージェントは出自国（父祖または自分の「故国」）と自らとのアイデンティフィケーションすなわち一体感、同一視を必ずしも必要としないが、ディアスポラ・エージェントの場合は大なり小なりそれを必要とする。そしてしばしば実体的な関係を持つことがある。たとえば出自国からの財政的な援助や情報の提供を受けることなどである。出自国の政府や団体は外地に居住する「同胞」およびその子孫にディアスポラ意識をもたせ、できればディアスポラ・エージェントたらしめるために直接的間接的な働きかけをするのが一般的である。たとえば日本政府は国際協力機構や海外日系人協会などを介して海外に居住する日本人やその子孫にさまざまな便宜をはかるなど働きかけを行っている（JICA、海外日系人協会ウェブサイト参照）。

本稿で在豪ブラジル人という場合は、現在オーストラリアに住んでいるブラジル人で、ブラジル生まれであるとする人（いわゆる一世）とブラジル人を先祖に持つという人（二世以降）の両方を指す。その規模は、2011年のオーストラリア政府によるセンサスによれば、前者が14,509人、後者が12,234人で、合計26,743人である。最近まで在豪ブラジル人の数は増加傾向にあった。ちなみに2006年のセンサスでは合計14,000人ほどであったから、5年で2倍近い伸びである。なお、これらの数字は実態をかなり下回っていると考えられる。たとえば、今回のインタビュー相手はブラジルで生まれ育ったが、父祖がドイツ人であったためにドイツ国籍も有している。彼はオーストラリアへはドイツ人として移住を果たしている。こうした人がセンサスでブラジル人であると書かなかった可能性がある。フィールドワーク中に何度も「3万人弱なんてありえない。もっともっと多いはず」という声を聞いたが、実態は3万人をはるかに超えていると思われる。なお、在外ブラジル人の総計は150万人～200万人といわれる。そのなかでも多いのは、在米の約37万人（2012年、USセンサス）、在日の約17万人（2015年、法務省）である。在米ブラジル人、在日ブラジル人とも2008年のリーマン・ショック以降人口減少傾向にあるのに対し、在豪ブラジル人は微増とはいえ増加傾向にあるといわれる。

### 3. リサーチクエストと研究の方法

上記の課題を遂行するために設定したリサーチクエストは以下のとおりである。

- RQ1 なぜ、どのようにしてオーストラリアへ移住したか  
RQ2 映画祭開催の契機はなにか。続けた理由はなにか。  
RQ3 主催者としてホスト社会（オーストラリア）や在豪ブラジル人社会とどのような関係を築いたか。  
RQ4 ディアスポラ・エージェントの語りから読み取れるディアスポラ意識はどのようなものか。

以上4個のRQからインタビュー用の質問を構成した。実際の質問はインタビュー結果に記述したとおりである。

なお、ディアスポラ・エージェントを特定するにあたり、筆者は次の2点の基準を設定し、その両方を満たしている人にインタビューを試みることにした。第1に、エスニック・イベントの開催など、目に見える形の社会的活動を展開していること。第2に、同胞コミュニティの公的な組織（今回の場合BRACCA = Brazilian Community Council Australia Inc.）の活動家たちからの推挙があること。

このような手順を経てディアスポラ・エージェントたる話者（インタビュー相手）を決定した。ここで取り上げるのはAL氏（プライバシーを考慮して仮名とする。以下敬称略）である。ALに対して、筆者が採ったインタビューの方法は非構造化インタビューである。すなわち、いくつかの質問は前もって用意しているが、話者との話の流れによって質問の順番が変わったり、新たな質問を発するという具合に、きわめて自由度の高いインタビュー方法である。さらに、この非構造化インタビューの特徴は、対話をできるだけ話者主動にもっていくという点である。その意味で、一般に非指示的方法とも呼ばれるが、インタビュアーが質問やその追加質問等で介入するシーンが少ない場合は半指示的方法というべきである。ALとのインタビューも結果的に半指示的方法を採ることとなった。なお、本稿の基となったフィールドワークは2013年3月と2015年1月から2月にオーストラリアのシドニーで行われた。以下にインタビュー結果を掲げるが、ここで紹介するのは実際のインタビューの一部である。その記述のしかたは対話・編集方式による（白水2016: 57）。

#### 4. インタビュー結果

##### インタビューの概要

インタビュー相手（話者）はオーストラリアにおけるブラジル映画祭開催者AL。1974年ブラジル生まれ。ドイツからの移民であるユダヤ人の祖父母からみればユダヤ系ブラジル人三世。高校時代をイギリスで過ごし、ブラジル帰国後、ブラジル最難関といわれるサンパウロ大学を卒業。その後アメリカの超有名校のひとつであるスタンフォード大学大学院で企業経営を学ぶ。2004年、オーストラリア移住。ドイツ国籍とブラジル国籍を有する。自らユダヤ人であると称する。職業は経営コンサルタント。

インタビューは2013年3月22日、および2015年1月26日にシドニー市内で行った。のべ7時間を超えるロングインタビューである。したがって以下の記述は、そのうちのテーマに沿った部分の抜き書きである。なお、Qは筆者の質問内容で、Aはそれに対するALの語りである。〈 〉は筆者による補足および考察である。

### ブラジル映画祭に関わる事になった経緯と上映形態

Q いつから、どのようにブラジル映画祭にかかわるようになったか。

A 私にはアメリカで演劇を学んだ徒弟がいる。彼もブラジル人で、彼はその後ブラジルに戻り、さまざまな文化活動に携わった。海外でブラジル映画祭を催行するという事業もその一つである。彼はブラジルに帰国後ずっと、私に「なぜオーストラリアにはブラジル映画祭がないのか、オーストラリアでもブラジル映画祭をやるべきである。だれもやらないならあなたが映画祭を開催すべきだ」と何度もいってよこした。

私はじつはブラジル文化のオーストラリアにおける普及にさほど関心があったわけではない。だからしばらく放っておいたのだが、徒弟はあきらめなかった。そこでようやく腰を上げる決心をした。それが2009年のことで、同年10月、オーストラリアで最初のブラジル映画祭開催に漕ぎ着けた。その時は、わずかに4本の映画を1晩に1回ずつ、4日間、シドニーでの一般の映画館を借りて上映するというものだった。しかし、映画祭は成功だったと思っている。

その翌年、つまり第2回目のブラジル映画祭はシドニーの後、ブリスベンとメルボルンの映画館でも開催した。同じ映画を持って、ブリスベンとメルボルンを巡った。その時は5本の映画を、第1回同様、各映画1回ずつ上映した。2011年（第3回映画祭）には映画の本数が11本になり、パースやアデレードも巡回した。上映回数は最初の13回から70回に増えた。

第4回目の映画祭は、それまでの10月—11月開催から2月（2013年）に変更した。上映したのは10本の映画である。開催地は同じだが、上映回数は合わせて100回以上になったはずである。上映期間は各都市まちまちだが、シドニーとメルボルンでは長くやって、10日間あまりになった。



図1 第3回ブラジル映画祭のポスター（2011年）



図2 第4回ブラジル映画祭のウェブサイト（2013年）

＜ブラジル映画祭の創始が自らの意志によるのではなく、従弟からの強い慫慂によるということは注目に値する。それでも毎年、回を重ねるごとに規模を拡大させていったのはALの経営の才を物語っていると考えられる。ただし、帰国後、筆者があらためて在豪ブラジル映画祭のポスター等をウェブサイトで検索したところではポスター等の露出が減ってきている印象があった。＞

#### 興行成績と営業努力

Q 映画祭は成功だったという理由はなにか。観客数か、それとも収益面か。

A 映画祭は成功だったというのは予想以上の観客があったという意味である。収益の面では芳しいものではない。赤字にならないようにするので精一杯ということところだ。映画の観覧料は一般の映画館と同様、おとな19ドル、学生14ドルに設定した。収益は映画館主とわれわれ主催者との折半である。チケットはインターネットと映画館の窓口の両方で買えるようにした。このやりかたは他の都市での映画祭のときも同様である。とにかく収益を伸ばそうと、今まで10月から11月にかけてやっていた映画祭を今年は2月にしたのは、2月はカーニバル最後の月なので、各都市でいくつもカーニバルのパーティーが開かれる。パーティーシーズンと抱き合わせの形で企画したが、売り上げは期待はずれだった。

Q 宣伝の方法はいかなるものか。メディアへのパブリシティ、コミュニティへの働きかけはどのように行ったか。

A 映画祭に向けての宣伝についてはかなり広範に行ったつもりである。一般オーストラリア人向けの『タイムアウト』マガジンはもちろん、ブラジル人向けのエスニック・メディア、たとえば最大手の『ファラモス・ポルトゲス』などにもパブリシティを行い、掲載してもらった。それに加え、今年は各州にあるブラジル協会にも働きかけた。映画祭をとおしてブラジル協会と交流ができたことに、自分自身満足している。さらに、シドニーにあるブラジル人の「親の会」にも働き掛け、彼ら・彼女ら（以後かれら）と企画段階から話し合ったことも大きな収穫である。

#### ブラジル人コミュニティとの交流

「親の会」との交流はとても意義あるものだったので、特に紹介したい。一般に、ベビーシッター

を雇うのはかなり費用がかかるので、子育て中の親たちは映画を見るために外出するのは難しい。ではどうすればいいか。アイデアを出し合った結果、上映中子どもたちを預かるという方法をとることにした。しかも単なるベビーシッターではなく、カポエイラ（注：ブラジル人の腿法。格闘技とダンスの中間に位置する武術）を子どもたちに教えるインストラクター（女性）を呼んだ。これがとても評判がよかった。

＜カポエイラを子どもに教える人はほとんどいないので、彼女は珍しい存在であるという。しかも、カポエイラを習得した人は下層の人が多いいわれるが、彼女は体育大学を卒業しており、教育者としても有能な人である。彼女はカポエイラの技全般を教えるのではなく、少年期の発達に必要な身体バランスを主として教える。彼女はカポエイラの実習にカポエイラ特有の音楽や楽器を使い、そのあと古いブラジル民話を語るそうだ。身体面だけでなく、ブラジル文化に造詣が深い教育者だといえる。彼女にとってもメリットはある。将来の生徒の確保である。実質的にいえば託児所であるこの教室が子供たちにとっての（そしてその親にとっても）試行の機会となるのだ。＞

### ブラジル文化への関心の推移

Q 映画祭などのブラジル関連の文化事業にかかわるようになって、ブラジルについての興味・関心に変化は生じたか。

A この活動を始めてから色々なことを学んだ。ブラジルの映画のことをたくさん学んだし、ブラジルの社会投資、社会事業なども勉強した。

あとは、シドニーにはさまざまな教室があることがわかった。たとえば、サンバのクラスも取れるし、サンバの演奏グループに入ることもできる。ほかには、カポエイラも学ぶことができる。これは是非薦めたい。シドニーやその近郊にカポエイラ教室は少なくとも6軒はあり、種類も豊富である。アンゴラ・カポエイラ<sup>3</sup>もあるし、地方スタイルと呼ばれる別の種類のものもある。地方スタイルの方がよりアクロバティックである。前述のベビーシッターをしてくれた女性のカポエイラ教師はボンダイに住んでいるが、シドニーにはほかにも1人の男性教師がいて、西の内陸部にも1人いる。他にもいる。今日、シドニー界隈ではカポエイラがブラジル文化の代表的存在といっているかもしれない。習いに来る生徒はブラジル系が多いのだが、ほかにもオーストラリア人やアジア人もけっこういる。アジア人はとても行儀がよく、いい生徒だといわれている。

カポエイラの稽古は動きだけではない。歌も歌わなくてはならないからポルトガル語の勉強も少し必要になる。少なくとも単語をいくつか習うことになるわけだ。

### カポエイラについて

Q いまカポエイラという言葉が出てきたが、あなたはそれをどのようなものと考えているか。

A カポエイラとは「戦うダンス」といってよい。カポエイラはブラジルに奴隷として連れて来られたアフリカ人によって発展、あるいは環境に合わせて進化したものだといわれる。当時劣悪な環境で暮らしていた奴隷たちには様々な敵がいた。自分の身を守るための技の修練はどうしても必

---

<sup>3</sup> アンゴラは西アフリカの国名。ブラジルへ奴隷として連れてこられた人びとの故郷のひとつ。

要だったわけだ。時には仲間同士から身を守るためにも技が必要だった。カポエイラは低い姿勢が特徴である。原型のカポエイラには特にその低い姿勢が顕著で、アンゴラ・カポエイラと呼ばれる。カポエイラのもうひとつの特徴は、そのパフォーマンスが戦いの訓練に見えないところである。武術ということを知られてはならなかったからである。家の主人や、奴隷を統括する人が近くにいるときには踊っているふりをした。だから「戦うダンス」といわれるのである。カポエイラは戦うダンスだ、という歌もあるくらいだ。

<ALはエスニック・イベント開催の告知活動の常道として、主流メディアやエスニック・メディアへのパブリシティも盛んに行った。すなわち各種メディアに情報を提供して記事等で取り上げさせる活動を積極的に行ったが、ここで注目すべきは、各種エスニック団体へのアプローチである。ブラジル系の団体に声をかけ、宣伝告知の協力を依頼した。そこでカポエイラの指導者とも知り合った。この女性指導者との出会いは、ALにとってよほど印象深いらしく、何度も何度もその名を口にしたし、カポエイラそのものについても熱心に語った。ブラジルの伝統武術ともいべきカポエイラについての知識の多くは彼女から得たものである可能性が高い。いずれにせよ、ALは映画祭の開催という活動を通して直接さまざまなブラジル人に会い、映画のみならずブラジルの豊かな文化を知っていった、もしくは再認識していったと思われる。>

#### ブラジルの文化活動への参画とブラジルへの思い

Q 筆者の日系アメリカ人三世の友人で、日系コミュニティの活動家がいる。彼は長く州政府の高官として働いており、ずっと忙しかったということもあるが、かつては日本文化に特段の興味はなかった。いわば一般のアメリカ人と変わりはない。それがあるとき、彼の叔父（日系二世）から日系のイベントの集まりに誘われて参加することになった。それをきっかけに日系コミュニティの活動家たちと関係ができ、何度かそのイベントを手伝うようになった。いまでは彼は日本人コミュニティにおいて重要な人物のひとりである。あなたの場合もそれに似たような感じがするが、どうか。映画祭に関わるようになってブラジル人コミュニティやブラジル文化に対する考え方に変化は生じたか。

A あなたのいうその日系アメリカ人と私は、かかわりかたの経緯はよく似ている。私はブラジルではユダヤ系三世で、祖父母がドイツからブラジルに移住してきた。私はリオ・デ・ジャネイロで生まれ、サンパウロに移り、留学等でイギリスとアメリカに住み、その後ここオーストラリアに住むようになった。イギリスにいたのは15歳から17歳までで、アメリカにいたのは23歳から27歳まで。ここオーストラリアに来たのは30才の時、2004年である。私は来月39歳になるから、これまで3分の1以上をブラジルの外で過ごしたことになる。私はブラジルではユダヤ系三世だが、ここではブラジル系一世ということになる。私はユダヤ人でもあるので、生粋のブラジル人とはいえないかもしれない。じっさい、カーニバルやサンバに対して特別の愛着があるわけではない。それが突然ここで映画祭を主催していて、あれこれと活動しているわけで、いわばディアスポラの身を楽しんでいるとっていいかもしれない。

Q ブラジルが恋しくなることはないか。

A かつてはブラジルという国が恋しくなるということではなかった。ずっと恋しかったのは家族である。家族が恋しいのはいまでも変わらない。

＜先に筆者は、ALは映画祭の主催者という役割を遂行する過程でブラジル文化に目覚めていった、もしくは、再認識したのではないかという想定をした。そこで筆者は彼の心理のより深い部分にふれるために、筆者の日系アメリカ人活動家の例を出して、考察を求めた。すると彼は筆者の質問の意図を理解すると同時にそれをきっかけにかなり個人的な話をし始めた。彼自身、筆者に向かって話しながら自分のブラジルへの感情、意識を整理していったように思える。その結果、自分はユダヤ人でもあり生粋のブラジル人とはいえないかもしれないが現にブラジル文化を普及する仕事をしている。これをディアスポラというのではないか、と彼なりの結論を導いている。＞

### ブラジル移住の経緯

Q そもそもどのような経緯でオーストラリアに来ることになったのか。

A じつはオーストラリアに来る前にいちど結婚したことがある。その後離婚した。だが、30歳になったころ、このままではいけない、ちゃんと家族を持たなければいけないと思い始めた。しかし自分はサンパウロでは家族を持ちたいと思わなかったし、リオでも、ブラジルの他の別のところでもない。いろいろと考えて、ひとまずかつて住んでいたカリフォルニアへ戻った。そこで友人たちに相談したところ、オーストラリアを薦めてくれた。それでオーストラリア移住を検討してみたわけだ。私はドイツの市民権も持っており、オーストラリアにはドイツ人として申請するとかなりたやすく入国できることがわかった。そこで、とりあえず、試しにオーストラリアに旅行してみよう。その後で移住するかどうか決めればよい。そのような気持だったので、まずはアメリカで定職に就こうと思い、カリフォルニアの会社いくつかの面接を受けた。それらの会社が私にアメリカの就労ビザを申請してあげるべきかどうか検討している間に、ワーキングホリデー制度を利用してオーストラリアに渡ることにした。年齢の制限が30歳までだったので、早く行動する必要があったのだ。

オーストラリアに着くとすぐ、この国のさまざまな場所、さまざまな物事に魅了されてしまった。ある意味アメリカやイギリスとはかなり違うが、かといってアメリカとイギリスの良い部分は持っている。結局面接を受けたアメリカの会社からはアメリカでの就労ビザがおりないと連絡がきたが、それはそれで問題なかった。私はそのままオーストラリア滞在を続けて再び離れることがなかったというわけである。

そのころ日本へもたくさんのブラジル人が労働者として渡っていた。しかし、自分は既に英語には精通していたし、英語圏で、スタンフォード大学卒の学歴が通用するところがよかった。といっても、オーストラリア人はスタンフォードの名前は「知っている」程度で、実際のところあまり詳しいわけではない。ある意味学位などは気にしない、いいかげんなどところがある。オーストラリア人のそういうところがまた私が好きなどころなのだが。

スタンフォードといえば、在学中、親友の一人が日本人だった。彼がまた信じられないくらい呑気で、いいかげんな男だった。彼は、勉強はしない、遅刻はする。まるでブラジル人のような男だった。ブラジルでニホンジンといえば決まって勤勉でまじめ、それも極端なほどの勤勉さで通っていたか



ら、スタンフォードで彼に会ったときは本当に驚いた。新しいタイプのニホンジンなのだな、と思うことにした。

Q オーストラリアとブラジルでは学位の評価に違いがあるか。

A 面白い事に、行く先々でその価値が違う。オーストラリアではスタンフォード大学のMBAが役に立つこともあった。オーストラリアのプライスウォーターハウス・クーパーズという会計士事務所を志望したとき、採用係が私の履歴書を見てスタンフォードの名前を見るなり「そうだ、それなら知ってる」といって採用してくれた。

しかし、ブラジルの金融会社では違った反応だった。スタンフォードを卒業するころ、サンパウロにあるJPモルガン・チェイスに面接依頼の願書を出したところ、すぐに面接してもよい、という返事がきた。それには、むしろ私のほうが驚いた。なぜなら私はスタンフォードの修士課程を終えたばかりだったからだ。面接が終わってから、「なにか質問したいことはないか」といわれたので、なぜ私を面接する気になったのか、と訊いたところ、「あなたがサンパウロ大学を卒業しているからだ」というのである。要するにブラジルのこの会社の場合、スタンフォードの学位が問題なのではなく、サンパウロ大学（注：ブラジル最高峰）卒業というほうが大事だったというわけである。

<ALのオーストラリアへの移住のプロセスは興味深い。アンジェロ・イシをはじめとするブラジル人の国際移動の研究者たちが明らかにしてきたように、1980年代に始まるブラジル人の国際移動の多くはデカセギであり、ブラジルに残してきた家族への仕送りや起業等のための貯蓄が主たる目的であった（渡辺 1995; 小内 2010a; 2010b他）。そこで語られる「脱ブラジル」という決断と行為は、必死さが伝わってくるものばかりである。それに対し、ALの語る移動のプロセスは、淡々としており、それほど懸念さが伝わってこない。就職先の選択、それがたまたま国境を超えた、という感じである。ALの資質（学歴や言語能力等）は「ミドルクラス移動」の条件を暗示させる。>

### オーストラリアにおけるブラジル文化の表と裏：メジャーとマイナー

Q あなたは映画を通してブラジル文化を紹介しているといっってよいか。

A それはある。ブラジル文化はかなり普及しているが、ブラジル文化には陽の部分と陰の部分がある。陽の部分はサンバ、つまりカラフルな羽をつけて踊る女性たちがいて、音楽も大音量。これは派手で、どうしても目立つし、一般の人の印象に残りやすい。このサンバは大通りのサンバ、サンバ・ダ・アベニダである。

こうしたブラジル文化の陽の部分は知られているが、陰の部分はブラジル人以外には知られていない。私が映画祭で重要視するのはこの陰の部分減らすことである。カルメン・ミランダの映画はその推進役といっってよい。カルメン・ミランダは果物を満載したデザインの帽子をかぶった女性として有名だ。ブラジルをハリウッドに持って行ったのは彼女である。つまりアメリカの大衆は彼女を通してブラジルを認知したといっってよい。それまでブラジルは知られていなかった。彼女はポルトガルで生まれてブラジルで育ったのだが、ブラジルの文化と色と笑顔をアメリカに運んだのである。私たちがそれに倣った部分がある。私たちの映画祭のモットーは「映画を通して知るブラジ

ルの姿・音・香気そして風味」である<sup>4</sup>。

これらは彼女がハリウッドでやったことそのものだ。たくさんの果物と羽と事物、様々な感覚でブラジルを体験する。彼女の映画の中で、どれかは思い出せないのだが、縞のシャツに低いつば帽子姿の人びとが小さなタンバリンを演奏する場面がある。あれがサンバ・ジ・ガフィエイラである。1940年代に大流行した。この時代がカルメン・ミランダの絶頂期といってよいかもしれない。

### 2013年のブラジル映画祭のテーマ：1940年代のブラジル 栄光の時代

ブラジル映画祭というと、2013年の映画祭で最初に上映したのが、あのペレより前に有名だったサッカー選手の映画だった。名前はヘレノ・デ・フレイタスという。トップサッカー選手だった。1940年代の映画で、彼が活躍したのも1940年代である。全編白黒。今回の映画祭のテーマが1940年代のブラジルだった。映画祭のウェブサイトを開くとカルメン・ミランダが見られるのも、そういう訳だからである。40年代のブラジル人で忘れてならないのが、サッカーのヘレノ、先述のカルメン・ミランダ、それからニューヨークの国際連合ビルを設計したブラジル人の建築家、オスカー・ニーマイヤー（ブラジルの発音はオスカル・ニエマイヤー）である。2012年12月5日、105歳になる5日前に亡くなった。1943年にニューヨーク現代美術館で彼の仕事が紹介されたことで、ブラジル建築が世界的に知られるようになった。

さらに、オーストリア人の小説家シュテファン・ツヴァイクも40年代のブラジルを語る時忘れられない。反ユダヤ主義から逃れるためにヨーロッパを離れブラジルへ渡った彼はブラジルに魅了される。彼はブラジルの文化の多様性と人びとの包容力を目の当たりにし、「Brazil: a Land of the Future」（『未来の国ブラジル人』）という本を書く。彼は1940年にブラジルへ行き、1941年にその本を出版したはずである。要するに未来の国というものは、1940年代のブラジルが象徴していた。まずサッカーのスター選手ヘレノ。彼はブラジルをワールドカップへ導く。カルメン・ミランダはブラジルをハリウッドの銀幕の世界へ連れて行き、オスカー・ニーマイヤーはニューヨーク現代美術館で紹介される。40年代、ブラジルは絶好調だったのである。

しかし、皮肉なことに、1942年のワールドカップは戦争によって中止され、結果的に、ヘレノは1度もワールドカップへは出場できなかった。それが象徴しているように、ブラジルが望みを託していた夢の多くは何年も報われなかった。ブラジル人にとって「未来の国」というのは悪い冗談になった。「はいはい、未来の国ですね。この国はいつまでも未来の国なんですよ。決して現実にならない。」

しかし、70年後の現在はどうだろう。ブラジルは世界第6番目の経済大国だし（注：名目GDP（USドル）ランキングでは7位：2012年）、世界で2番目に空港の多い国である。空港の数はEU加盟国を全て合わせた数を上まわる。そして、ツイッター利用者は世界2番目、これは日本より多いはずだ。携帯電話利用者数も世界3番目に多い。

---

<sup>4</sup> 第4回 ブラジル映画祭のウェブサイトより

ブラジル映画祭は、映画をとおしてオーストラリアにブラジルの姿・音・香気・風味をお届けします。第4回目となる今年は、5つの州それぞれの首都、シドニー、メルボルン、ブリスベン、パース、アデレードで、ブラジル最高の映画10本を公開。映画とともに、映画祭では音楽や舞踊、美術、料理などブラジルの文化、芸術を広く紹介します。どうぞお出かけください。そして、これぞブラジル！という雰囲気の中にご自身を浸してみてください。（翻訳 筆者）

このようにさまざまな分野で、ブラジルは発展をとげたという感じがする。“永遠の未来の国”ではなく、“今まさにこの時の国”なのだ。カムバックしたという感じである。ブラジル人の多くにこの感覚が浸透してきていると思う。過去何年もの間、ブラジル人は自分たちが劣っていると感じていた。しかし今は、「いや、自分たちは劣っていない。よくやっているほうだ」と感じている人も少なくないはずだ。

もちろん、ブラジルには、まだ多少の混乱もあるし、事件も少なくない。したがって、ブラジルやブラジル人に対する見方も一定しているわけではない。少なくともオーストラリア人はブラジルに対してとても肯定的だが、ブラジル人のなかにだって、「そんなことばかりじゃない。分かっていない。ひどいものだよ」という人もいる。外国の一般の人からは、ブラジルでは皆がダンスをしているとか、熱帯雨林があり自然が豊富だとか、ロマンチックなイメージで見られることが多い。それはいわば1940年代のイメージでもある。そして今でもそういう部分はある。しかし今は、オーストラリアに渡ってきたブラジル人が知っているかつてのブラジルとは違ってきている。たしかに未だ犯罪は多いし、問題も山積している。しかし一方で、昨日読んだ『ナショナル・ジオグラフィック』に公共交通手段の利用についての記事があったのだが、ブラジルと中国、そう、この2つの国が環境にダメージを与えないために自転車を使う人の多い2大国だという。他の分野でもブラジルは先頭に立っている。ブラジル人は自分たちの価値について意識する時期に来ていると思う。

<ブラジルには中学までしかいなかったし、大学では経営学を学んだALはブラジル文化や歴史については細かなことは知らなかったと思われる。それがここでは細かな情報を交えて熱弁をふるっている。彼はブラジル映画祭を重ねる過程で、ブラジルについて様々なことを学んだと思われる。彼の語りが具体的で数字や年号が詳細であることがそのことをものがたっている。この項でかれはことさら昨今のブラジルを明るく描こうとする。『ナショナル・ジオグラフィック』という一般向けの経済地理や人文地理の雑誌に載った記事まで援用してブラジルの昨今の経済発展を説明することに注目したい。>

### ブラジルの社会移動と移民の実態

Q ブラジルが発展する中、オーストラリアへ移住するブラジル人は減っていると思うか。

A 今ブラジルの失業率は4パーセントだが、オーストラリアに移住してくる人の数は減っているし、ブラジルへ戻っていく人たちもいる。例えば、ブラジル人でオーストラリアやアメリカの上位の大学、場合によっては、そこそこの大学の学位を持っていればブラジルでの就職のチャンスは非常に高い。それは、何か特別な高い技能を持っているというより、そういう学校に行かれるだけの環境に育ったということとも関係があるのではないかと思う。では、ブラジルはコネ社会か、というと、必ずしもそうとばかりはいえない。例えば私の祖母はヨーロッパ（ドイツ）からほとんど無一文でブラジルに来たが、後に、財も社会的地位も得た。階層移動という意味での社会移動性は低いとはいえないだろう。おそらく、統計的に見れば、ブラジルの社会移動性は高いと思う。かといって、社会的な溝があることも確かで、まだまだコネも効くし、階級格差も大きい。国民所得分配係数は世界最低レベルだ。つまり、両極端な国なのである。中流階級は相対的に少ないだろう。

このように、中流階級が少なく、階層が上と下に分かれていることがブラジルの問題である。

ただ、皮肉なことに、上にも下にも厳しい状況なのだ。通常なら上流の裕福な人たちはさほど大変に思わないはずだが、かれらはその階級を維持し続けるのが容易ではないと思っている。ひとつ判断を間違えると、瞬時に（階級が）落ちると思っているのである。実際ブラジルの金持ちたちには働き者が多い。そして、その階級を維持するためにはお金をかけて体裁を整えなくてはならない。面白いことに、一定の収入のある人はみんなが洗濯、料理など家事全般をやってくれるハウスマイドを雇おうとする。人件費がとても安いからだ。「面倒なことはみんなやってくれるんだから、人を雇えばいいんだよ」と思うわけだ。結果的に、メイドがいるお陰で会社で長時間働く。職場にいる時間はむしろ長くなっている。経営者の側は雇っている労働者を惜しみなく使えるわけだ。時間当たりの賃金はむしろ低くなっている。1970年代、私の親の世代はそうではなかった。もう少し効率の良い働き方だったように思う。私の親の世代は、オーストラリアと同じくらいの労働時間で、ちゃんとメイドが雇えた。しかし、80年代後半から90年代にかけて、様子が変わり始めた。たとえば、ブラジルでは2000年代に、MBA（経営学修士号）を持っている人たちが国が受け入れるようになってから投資銀行などの創立が増えてきた。そうした職場ではたいてい就労時間が非常に長い。私の従弟たちはサンパウロの投資銀行や弁護士事務所で働いているのだが、ほぼ毎日、夜中の12時過ぎまで仕事している。かれらの収入は額面では私より多いかもしれない。しかし時給で比較するとかれらのほうが割安なのである。それは、かれらの残業時間に対する手当てが非常に少ないことも関係している。

かれらはその稼いでいる給料からメイドを雇う。つまり、かれらが職場にいる間メイドが家の雑事をしてくれている、という感じだ。では、メイドを雇うのをやめて自分で家事をすれば職場にそんなに長く居ないですむではないか、と思うだろう。しかし、そうはいかない。ブラジルの高給の企業では1日10時間が標準で、12時間、場合によっては14時間以上働かないと仕事をもらえない、という現実がある。

Q 観光以外では、もうブラジルに戻ることはないのか。

A それは難しい質問だ。私の母は未亡人で、私は彼女のひとり息子である。だから母に何かあればブラジルへ駆けつける。ただ、そのままブラジルに居続けるかどうかは別問題である。今のブラジルにはビジネスチャンスがたくさんある。しかし、問題はサンパウロ。サンパウロに住むのは難しい。というのは、サンパウロの犯罪発生率は、例えば上海などより悪い。それに環境汚染。ひどい交通渋滞に悩まされている。とても健康的な環境とはいえない。大体、ブラジルの大都会には戸外のスペースや公共の場所があまりないのだが、サンパウロも公共の場所はないといっていい。ほとんどが私有地。公園はぼつぼつとはあるにはあるが、あまり魅力的なところでもない。では、ブラジルの別の場所はどうかといえば、例えばブラジリアは住むにはよい場所かもしれないが、仕事が限られる。政府などの国の機関で働くしかない。

ブラジリアはオーストラリアのキャンベラに似ている。そう、まるで双子のようだ。ブラジリアもキャンベラと同じように首都の機能を果たすだけのために作られた町。ただ、ブラジリア独特の部分もある。ブラジリアはルシオ・コスタによって飛行機の形にデザインされた。上空から見ると飛行機の形に見える。都市計画がなされた1950年代のころ最もモダンなものの象徴が飛行機だったからであろう。この都市のほかの画期的なことは、車道脇の歩道がないことだ。歩道がないのは、

将来の人々はみんな自動車に乗っており、歩いている人はいないはずだと考えたのであろう。都市計画は主にルシオ・コスタによってなされ、建築の設計はオスカー・ニーマイヤーも参加した。ルシオ・コスタは画期的なアイデアを次々に取り入れた。

### ブラジルへの思い

ブラジルを離れているとホームシックならないか、と訊かれることがある。私はリオで生まれてサンパウロで育った。だが、理性の面では自分が育った故郷サンパウロは好きな場所ではない。奇妙に聞えるかもしれないが、理性的には好きではない、でも懐かしい。あなたが東京のことを話していると、私はすぐにサンパウロとの共通点が想い浮かぶ。一言でいえば大都市のもつリズムが懐かしい。サンパウロも活力というか迫力のようなものを持っている。それに比べればオーストラリアはある意味イスラエルの「キブツ」である。地球上最後の社会主義国。それはいろいろな国を訪ねている私の目からも、サンパウロの視点からも明らか。サンパウロは香港のようなものだ。悠長なモノの言い方なんかしてられない。ニューヨークの人たちより気が短い。ニューヨーカーたちは「くたばれこのやろう、、、！」と悪口を言うのに時間をかける。サンパウロの人たちは悪口も時間の無駄なのでいわない、そんな感じだ。東京も似たようなものではないかと思う。

シドニーでは、街角で「メキシコ料理を食べたいなら私のお気に入りのお勧めレストランがあるわ」というふうに見知らぬ人が教えてくれたりする。ここではみんな気楽に話しかける。私がシドニーや、オーストラリア全般を気に入っている理由の一つだ。それはサンパウロにはない。しかしサンパウロには疾走感のようなものがある。サンパウロで感じるアドレナリンは本当に独特で面白い。それが何かを作り出したり、あちこち見て歩くといった行動につながっている。人びとは新しい情報、創造性、新しい知識などを熱心に探している。いっぽう、ここオーストラリアでは、「ま、そう心配してもしょうがない、もう一杯ビールでも飲もう」ということになる。全体にリラックスしている。

私がシドニーに移住してきたときは独身だったし、よく外出した。アメリカと同じように英語が通じるから、いつもの調子で会話は「名前は何ていうの？」「仕事は何してるの？」で始めた。でも、オーストラリア人にとって私がなぜこんな質問から会話を始めるのか理解できない。「なぜ私の職業なんかを聞いてくるの？何が目的なの？」というわけだ。オーストラリアはきわめて平等主義的な社会だから職業などで収入を類推してもしかたがない。ここで質問することは「週末は何をしているの？」だ。この微妙なニュアンスがだいじなのである。「ビーチに行くわ」「そうか、どこのビーチ？ボンダイビーチ？クージー？それともアバロン？」好んで行くビーチで本人の社会的な立ち位置がわかるというわけだ。

ただ、私はビーチの話、余暇の話ばかりだと退屈してしまう。私はみんなの職業、情熱をかたむける対象が何か知りたい。週に40から60時間の労働時間、何をしているのか。ここオーストラリアの人はそういうことはあまり話さない。サンパウロでは仕事の話をする。それは、お金の話というより、「あなたは今どんなことに関わった仕事をしているの？」「それは上手く進んでいるの？」ということだ。「いい感じだよ。レストランの仕事を広げているんだ。僕はこれからこんな風に進めようと思うんだ、、、」「それはよかったね。でも自分はその考えには賛成できない。やるべきことはこんなことだと思うよ」という風にお互いのどんな興味にも関わっていく。サンパウロには発展

への活気がある。足を投げ出し寝そべってビールを飲んでいる訳じゃない。外出してビールを飲むには飲むが、席に着いたら「あなたの職業は？」と始まる。そしてその後は、もし相手が起業家だったらイベントにしろなんにしろビジネスがらみの会話がどんどん進んでいく。そういう感じが恋しい。ブラジル全体ではなく、特にサンパウロのそういう感じが恋しくなる。ま、だからといって住みたいとは思わないけどね。

とにかくサンパウロの変化は著しい。人口もいまではサンパウロは国全体の10パーセントを占める。そして、1990年代半ば以降、文化の面でもサンパウロはリオを追い抜いてしまった。長い間リオ・デ・ジャネイロの文化はブラジルに強い影響を及ぼしてきた。ブラジル人のアイデンティティは全てリオ生まれのカリオカとつながっていた。会話が達者で都会生活に通じていて、ビーチへ行くのを楽しんでリラックスもある程度はしている。それがブラジル人だった。

ところが、リオが経済恐慌に陥って、多くの経済人がサンパウロに移って行った。政界の人までもサンパウロに移り住んだ。1995年以来、今日連邦政府にいるのはサンパウロ出身者つまりパウリスタがほとんどという状態になった。かれらは行政部門もおさえてしまった。国会は各地からの代表が集まっているが、パウリスタの気風が席卷している。政府だけでなく会社でもパウリスタの気風を持っている。パウリスタはいまや様々なところで大きな影響を持つようになった。他国のことはあまりよく知らないが、ブラジルのような急激な文化の変化は他に見たことがない。

1984年に軍の独裁が終わったが、その後も経済は閉鎖的だった。それを対外経済開放へと政策転換し、構造改革等を進めたのがフェルナンド・コロール・デ・メロ大統領である。彼は1992年末、汚職疑惑で上院により弾劾され、その後辞任してしまった。私が思うに、彼は在職中悪いことをたくさんしたが、よい事も行った。経済の開放はよいことの一つである。その後、ブラジルは他の国の経済の仕組みにも注目し始めた。

ブラジル躍進のきっかけは1994年である。この年、極度のインフレが消滅した。これが大きな転機だった。当時の財務大臣が有能だったのだ。彼は翌年、大統領に選出され、9年間在職した(1995-2003)。とても頭のよい人で、以前ソルボンヌの社会学の教授だった。(私の母は社会学者だったが、かつて彼の学生の一人だった。聡明な頭脳が中央政府を牛耳り、たいへんな変化をもたらしたのである。

次に労働党政権という、別の衝撃が訪れこの変化が進んだ。これはよいことである。賛成するものばかりではなかったが、とにかくこの変化は受け入れられた。そこがアルゼンチンとは違う点だ。アルゼンチンではみんな政府の悪口や不平をいっているだけだが、ブラジル人は違う。たとえばバスを長い間待っているのになかなか来なかったとする。「どうしたんだ、バスが来ないぞ」「本当だ、来ない。じゃあどうしようか。よし、誰誰さんに連絡してみよう」となる。ブラジル人には当事者意識が芽生えている。問題解決のために一緒に動くのである。

ところがアルゼンチンではどうだろう。「バスが来ない」「そうだな、全くダメだな政府は。仕方ないからビールでも飲もう」となる。ワインもよく飲まれているのでワインでもいいのだが、ともあれ、大きな違いである。しかし経済の仕組みは同じである。牛肉などの食料をはじめ一次産品を大量に輸出し、それに比べれば機械などのハード商品の輸出は多くない。両国はこの点ではとても似ている。

そうした中で、アルゼンチンは行き詰まっているがブラジルはよくやっていると。じつは、

アルゼンチンはブラジルよりも条件は良い。識字率も高いし、福祉もブラジルにないものがたくさんある。しかし行き詰まっている。違いは政治である。アルゼンチン人は自国の抱える困難の大きさに絶望的になっている。ブラジルでも腐敗による問題は今でも山積みだが、ブラジル人は解決しようと行動に移している。私は、ブラジル人も以前はアルゼンチン人のような態度・考え方だったと思うが、今はみんながもっと社会にコミットしようという意識を持っている。自分たちが社会を変えられると感じている。実際これはブラジル人の新しい傾向である。90年代後半まではブラジル人もアルゼンチン人のような考え方だった。

こうしたブラジル人の変化はミドルクラスの勃興と深い関係がある。かれらがブラジル社会を変えているのだ。この点で面白いと思うことがある。ここオーストラリアに来たブラジル人の多くは貧しさから逃れ、よりよい暮らしを求めてやってきた。そしてそこそこの暮らしを獲得した。消費生活など、以前なら叶わなかった事が今ではできていると感じているはずだ。ところが、ブラジルを振り返ってみると、自分の家族や友人がみんな快適そうに暮らしている。オーストラリアにやってきたブラジル人は思う。「ちょっと待てよ。オーストラリアに移住したのはいいけど、国に残したみんなの暮らしは快適じゃないか、まいったな。」

われわれは新天地オーストラリアで確かに一定の成果を得た。と同時に、もといた場所も新しく変わっていた。どうしても心に引っかかるものが生じてしまうわけである。つまりこういうことだ。オーストラリアに移住してきたかれらは、まずレストランやホテルの掃除係といった手作業の労働者として働く。しかしかれらはブラジルでは歯医者やエンジニアだったかもしれない。実際、友人の妻は故国で会計士だった。いまでこそオーストラリアで会計事務の仕事をしているが、彼女はオーストラリアに来てから2年間、ウエイトレスとして働いたのだ。たとえさほどの成功をおさめていなくとも、かれらは思うのである。「これでもいい方だ。ブラジルにいるよりはましだ」と。でも時間が経ち、故郷の友人を見るとけっこう良い暮らしをしているではないか。それを見ると移住したほうとしては複雑な気持ちにならざるをえない。これは結局、ディアスポラの問題といってよいかもしれない。われわれはディアスポラ・ブラジル人なのではないかと思う。たとえば私はユダヤ人の血を受け継いでいるのだが、イスラエル人ではないので自分がイスラエル人のディアスポラだとは思わない。でもブラジル人のディアスポラだとは思う。

<ALのいうブラジル経済躍進のきっかけをつくった当時の財務大臣はフェルナンド・カルドーズで、1993年から翌年にかけて財務大臣、95年から2003年まで大統領を務めた。ALはカルドーズがソルボンヌの教授だったといっているが、それは留学先で、教授をしたのはケンブリッジ大学のはずである。ブラジルではサンパウロ大学社会学部長を務めた。

先に、ALは近年のブラジルの経済発展を明るく述べた。この項でも基本的にはそのスタンスは変わらない。しかし、ミドルクラスから上の階層の生活の実態は、オーストラリアと比べれば、かなり厳しいと分析している。さらに犯罪率や大気汚染も深刻であるという。ブラジルへ帰らない(帰れない)理由を探しているようにも聞こえる。また、オーストラリアについても、彼から見たその長所、不可解な点を交互に語る。このあたりにディアスポラならではの矛盾、屈折、葛藤が見て取れる。>

## ブラジル映画祭の宣伝、広報

Q ここで、映画祭主催の話に戻りたい。映画祭の宣伝、パブリシティに用いたメディアを教えてください。

A 映画祭の宣伝媒体としては『ファラモス・ポルトゲーズ』のようなブラジル人向けのエスニック・メディアだけでなく、メジャーなメディアとしては『タイムアウトマガジン』がある。あと、今年は予算の都合でやらなかったが、2012年は各都市の大手新聞に広告費を払って宣伝した。『シドニー モーニング ヘラルド』『エイジ』などである。

公共放送のSBSのラジオ局のポルトガル語放送が映画祭の初回から応援してくれている。その局からいつもインタビューを受ける。今年は2度受けた。チケットのプレゼント企画も設けてくれた。『タイムアウト』も同様にさまざまに協力してくれた。エスニック・メディアでは、『ファラモス・ポルトゲーズ』のほかには、もうひとつ『レイダー』という雑誌（後にオンライン雑誌に変わった）が去年は映画祭の記事を掲載してくれた。漫画雑誌では、ブラジル人が出している『タングアンドチーク』があるが、そこには宣伝の掲載はしてもらっていない。

あと、アクセスしたのはオンラインメディアがある。前述のように『レイダー』はオンライン雑誌になったが、それに伴いブラジル人向けの雑誌からラテンアメリカ人向けへと趣向を変えた。

ほかに、ソーシャルメディアも使う。フェイスブックやツイッターである。ところでラファエル・ピアースはオンラインテレビ番組で「ブラジレイロ」という、ブラジルとオーストラリアとポルトガルをミックスしたような番組を持っている。これこそ本当のエスニック・メディアという感じである。彼はオーストラリアに住むブラジル人のことも取り上げ、どこから来て何をやってどこで働いているのか、といったことを本人にインタビューする。この番組で2013年の映画祭の事を取り上げてくれた。

## エスニック・メディアなどのメディアへのアクセス法

Q 映画祭のパブリシティに応じてくれるエスニック・メディアやメジャー・メディア（主流メディア）とのコネクションの作り方を教えてください。

A 映画祭の活動をしていることが知られてくるとエスニック・メディアとのコネ作りはそう難しくない。相手も興味を持ってくれる。メディアは常にコンテンツを欲しているからだ。私がコンテンツを提供し、かれらがそれを報ずる。持ちつ持たれつの関係。懸命に説得する必要もない。エスニック・メディアにとって私の提供する情報はもってこいだからである。私にとって関わりを持つのが難しいのは、大手主流メディアである。ABCなどの大手放送局はもちろん『タイムアウト』紙ですら無料のパブリシティは難しい。『タイムアウト』にはお金を払う。協力関係にあるということでディスカウントをしてはいるが、2013年はカーニバルの時期に映画祭をずらしたので編集者に映画祭とブラジルについての記事を書いてもらえた。しかし、大手メディアにブラジルについて関心を持ってもらうのは大変である。ブラジル人にブラジルのことを売り込む方が、もちろん、はるかに簡単である。

『ファラモス・ポルトゲーズ』は今ではブラジル系のエスニック・メディアとしてはオーストラリアでは最大手の雑誌だが、今年も「よう！元気？」といいながら、ブラジル映画祭が表紙になっている同誌を持って、私に会いに来てくれた。とても気軽な関係である。ブラジルの一般大衆も同



じである。ブラジル人に宣伝するのに私が苦勞する必要はあまりない。みんなお互いの会話で情報が広がるから。今やみんな映画祭があるという事を知っている。

ブラジル人ではない人たちにはこちらから誘いに行かなくてはならない。手間をかけなくてはならないのはブラジル人以外の人たちに対してである。そのためにはまずブラジル人を呼ぶ必要がある。来てくれるブラジル人の数は多いほどよい。それが他の人びとを呼び、ブラジルの文化の宣揚につながる。じつはもっともっとブラジル人のみなさんに来て欲しい。映画祭がブラジル人以外にも広く認知されるよう、宣伝を手伝っていただきたい。

ブラジル人がブラジル映画祭の呼び水になる、というのは「寿司」と日本人との関係に似ている。つまり、寿司を食べたくなった時は日本人がたくさん入っている寿司屋に行けば間違いがない。日本客が大勢いれば「本物の日本人が食べているんだからおいしい寿司だろう」となる。同じく、私のブラジル映画祭にブラジル人がいなかったら、ブラジル人以外の人たちは入るのをためらうはずである。

### 文化的没入法教育 (cultural immersion) としての映画祭

ブラジル人観客がたくさん必要なのは、映画祭が「文化的没入法教育」としての機能ももつからである。一晚19ドルで実質的にブラジル文化に浸れる、没入できる。映画祭ではポルトガル語が聞こえるしブラジル人の普段の行動が見える。ブラジルの物語が観られ、観客にはブラジル伝統のカクテルであるカイピリーニャが配られる。まさに文化的没入法教育を受けている感じである。むしろ、ブラジル人以外にも映画を理解してもらうために英語の字幕が付いているが、今年初めて、ほぼ全ての予告編にも字幕を付けた。ブラジル人の映画プロデューサーたちは、作品に字幕をつけないままインターネットにアップして、その作品が売れると思っているが、それではオーストラリアの人びとは来てくれない。

### 日本のブラジル映画祭

英語の字幕を付けることはオーストラリアではそう難しくはない。ブラジル語と英語の両方に通じている人がけっこういるからだ。それに比べ、ブラジル映画祭を日本で企画している人を知っているが、日本ではけっこう大変そうである。彼は自分で全ての作品の字幕作業をしなくてはならないということだ。ポルトガル語がよくわかる日本人の翻訳者は少ないので、もし外注したら大変お金がかかるだろう。彼は日本で通信会社を経営している。彼は日本にいるブラジル人についてたいへん詳しいようだ。彼の映画祭にはブラジル映画だけでなく、日本に住むブラジル人について日本語で作った、字幕なしの作品もある。日本に住んで15年になる人。彼が二世なのか三世なのかは分からないが、ともあれ、日本人の血を引いていてブラジルに生まれ、日本に行った。彼は東京、大阪をはじめ、日本の5都市で開催しているはず。なかでも大阪での開催は大変だと言っていた。大阪の人たちは仲間内で結束が固いからその分、よそ者が入るのが難しいと。東京は国際都市だし、外国人のコミュニティも多いので相対的にブラジル映画祭も理解されやすいという。

### ディアスポラ・ブラジル人の心情

Q では、将来どこに住むと思うか。定年後の人生など考えたことがあるか。

A 将来のことを考えたことはある。つい先日、そのことについて考えた。自分はどこで定年を迎えたいだろう。普通は海岸近くの居心地のよい場所とか、そんな場所が思い浮かぶものだ。でも私が考えたのは「定年？まさか、自分は仕事を止めないぞ！」というものだった。将来住むとしたら様々な物事と関わる場所。たぶん、海沿いの町とか、毎日目覚めると海が見えるような場所にはないだろう。今はテクノロジーがあり、インターネットで何でもできるとはいえ、周りに人が大勢いて情報交換し合えるというほうが魅力的である。

Q あなたのいうディアスポラ・ブラジル人とはたいへん興味深い概念だ。それはたとえば、ブラジルのことを時々考える、でも自分はオーストラリアにいて快適に暮らしている。時々ブラジルの音楽も聞いたり優れたブラジルの映画も見る。たとえ観光客としてブラジルに戻ることはあっても留まるためではない、つまりブラジルに帰国永住することは二度とない、そのような心持のことか。

A そうだ。それに、自分で選択できるということも意味する。ブラジルの食事をして、ブラジルの音楽を聴いて、ブラジルの音楽でダンスもできる。ブラジルのことは、自分で選べばどんなことでもここでもできる。しかし、ブラジルという国の問題に付き合う必要はない。そしてだいじなことは、私がここオーストラリアにいて、ここの人たちの知らないブラジルのことを伝えたり教えたりすることができるということだ。逆に、ブラジルに旅行などで行った場合は、ブラジルの人達にオーストラリアの実情を伝えたり教えたりすることができる。たいていの場合人びとは、他所のことについては、メディアの受け売りのようなことしか聞いていないと思う。

Q ディアスポラ・ブラジル人といえば、ブラジル出身の社会学者クリスティーナ・ロッカが“Brazilian Diaspora”に関する論文を書いているが、読んだことがあるか。

A 読んだことはないが、ウェスタンシドニー大学の学者なら知っている。まだ著作は読んでいないが、こうした論文が著されるということは最近の流れだろう。アメリカやイギリスでブラジルが取り上げられることは今まではなかったから。ブラジル人ディアスポラというのはほんの最近の現象だ。在外ブラジル人の特徴は最下層を形成してきたということ。これが第1の波。ところが、その後、経営学修士や他の学位を取得するために外国に行き、そのままニューヨークやロンドンに残って働くという人たちが出てきた時期を迎える。これが第2の波。

最近の波が第3の波。クラスC、C階級の人びとの到来だ。貧しさから逃れるためにブラジルを出たということは第1の波の人たちと似ているが、大きな違いがある。かれらはオーストラリアの英語学校や大学で学び、オーストラリアで就職をした。そして自分たちでディアスポラ・コミュニティを確立し、たとえば映画祭を手助けするなど、ブラジル人として自分たちの文化を表現している。

<クラスCというのはnew-middle class 新中間層とでもいうべき階層のことと考えてよい。前の世代まで労働階級だったものが、大学進学などを経て、自分の代で初めてミドルクラスになった人びとである。そうした人びとが在外ブラジル人に増えてきたということだ。>

## エンターテインメントとビジネスとの関係

ところで、これまでブラジル人にとって人に見せるエンターテインメントはビジネスだった。カルメン・ミランダの時代からずっとサンバを見せたり、エンターテインメントの公演は常に収入の手段だった。エンターテインメントというものはいつも、ジプシーのようだ。音楽やダンスはいつでもお金を稼ぐ方法だった。今は少し違う。ドイツ系の人びとが10月に催すオクトーバーフェスタ、つまりビール祭が好例である。ビール製造者たちが披露するビールを飲み比べする祭なので当然みんな酔っ払う。飲んで飲んで飲み続ける。ドイツの本当に伝統的なイベントだ。この祭の趣旨は「これは私たち民族のお祭です。誰でも参加できるけれど、私たちの祭りです」というもの。しかも、金儲けばかりが目的ではない。

いまカーニバル、ブラジルのカーニバルもそのようなものになりつつある。じつは、長い間「私たちはカーニバルをするから、あなたたちはお金を払って見てね」というものだった。リオでもそうだった。長い間、まるでブロードウェイカーニバルショウだった。ブラジルの外では誰かがサンバやカーニバルのようなものをやると「これをショウにして、ブラジル文化で金儲けをしよう」となった。だが、ここ数年前からリオは本来の形に戻り始めた。路上で行う民衆のカーニバル。ブラジルの外でもストリートカーニバルも行われるようになった。「自分たちのカーニバルをしよう。もちろん誰が参加したって歓迎だ」というわけである。

しだいに、ビジネス用の祭と自分たちが楽しむ、見に来たお客さんといっしょに楽しむという祭の両方を催すようになってきたように思う。ともあれ、ブラジル人ディアスポラというテーマは面白い。とても興味をそそられる。

## 5. 総括

それぞれのリサーチクエスチョンに答えるかたちで本稿のまとめとする。

### RQ1 なぜ、どのようにしてオーストラリアへ移民したか

話者（インタビュー相手）であるALがこれまで住んだことのある地域は生まれ育ったブラジル、高校生活を送ったイギリス、大学院時代を過ごしたアメリカ、そして現在住んでいるオーストラリアと4か国に及ぶ。これに旅行をした国を加えるとおびただしい数になる。むろん、日本にも旅行で来たことがある。このように見てくると彼の行動の特徴のひとつは「超域性」、もしくは「越境性」にあるとってよい。このような彼個人の行動傾向はその家族的背景、民族的背景と深くかかわっている可能性が高い。すなわち彼が言及しているように、彼の出自はユダヤ人である。遠い先祖の出自については訊かなかったが、少なくとも曾祖父母の代までにはドイツに移動していた。そして祖父母の代にブラジルに移住した。したがってALはユダヤ系ブラジル人三世とも、ドイツ系ブラジル人三世とも称する。昨今は「ブラジル系オーストラリア人一世」と、冗談交じりにいったりする。多様なエスニック・アイデンティティをもっているわけだ。

さらに、国籍法の関係で、彼は現在、ドイツ国籍とブラジル国籍を有している。このままオーストラリアに住み続ければオーストラリア国籍の取得も可能であろう。ナショナル・アイデンティティも多様であるといつてよい。母親はブラジルの大学の社会学の教授であり、政府の顧問であり、世界銀行にも関係しているブラジル有数の知識人である。母親がPh.D.取得のためにイギリスに留学

した時、彼を伴っている。だから彼は高校時代をイギリスで過ごした。その後いっしょにブラジルに戻った。聡明で勤勉なAL青年はブラジルでもアメリカでも最高水準の大学や大学院を卒業した。専攻は家業を手伝うためもあり企業経営である。どこでも「役に立つ」現実的な分野である。英語も完璧である。越境性という、いわば家族の伝統と、国際移動を青年期に経験し英語圏では困らないという素養を身に付けたALは、移動の選択肢のひとつとしてオーストラリアを選んだ。ALと長時間にわたり話した（話し込んだ）筆者はその語彙の豊富さと社会情勢分析の鋭さ、諸国の歴史的知識の深さに驚かされた。たしかに「故郷」ブラジルは危険に満ちた都市であり、大気汚染も問題である。移動のプッシュ要因とはなりえよう。しかし、家庭は豊かだし、従弟の話や母親の話が頻繁に出てくるところから察するに家族親族関係も良好のようである。それらに勝るプル要因がオーストラリアをはじめとする「英語圏」にあるとは、筆者などには思えないが、ALにはあったわけである。

RQ2 映画祭開催の契機はなにか。続けた理由はなにか。

ALが率直に述べているように、彼は最初から映画祭主催に乗り気であったわけではない。ブラジルに住む従弟から熱心な懇請があったが、むしろそれは迷惑な提案であった。しかし従弟の執拗ともいべきリクエストに抗しきれなくなり、ついに2009年、開催を受諾する。ALがオーストラリアに来たのは2004年であるから、少なくとも3、4年は受諾するかどうか逡巡していたようである。しかし、開催してからは、徐々にではあるが、上映する会場も番組も増やしていった。いわば消極的態度から積極的態度への変化である。彼のこうした態度変容について考えてみたい。

ALの話聞きながら思い出していたのは筆者の数人の知人のことである。かれらは、いまはコミュニティ活動の重鎮であるが、いずれも最初は積極的な意志で参加したわけではなかった。ひとりには仲のよい叔父に誘われて参加したし、別の知人は大学の同級生からの誘いであった。別の女性は母親からなかば「強制的に」ボランティアグループのメンバーにさせられた。「年会費を払っておいたから、来週からミーティングに出なさいね」といわれたそうだ。かれらは、いずれも、何度か参加しているうちに、いつのまにか下級オフィサーの役を与えられ、その数年後にはより責任の重い役が与えられ、という具合に「巻き込まれて」いった。筆者のみるところ、巻き込まれていった主要な要因は他者との関わり合いである。すなわちボランティア活動を通してエスニック・コミュニティの様々な人びとと関係が生じる。なかには尊敬できる魅力的な人もいる。知らなかったことをいろいろと教えてくれる人もいる。彼らとの交流が心地よいのでボランティアを続ける。そうしているうちに、彼、彼女自身が周囲から期待され、それに応える仕事をすると称賛される。こうした好循環が続くと活動も熱心にならざるを得ない。逆にいえば、こうした好循環が生まれないと消極的な動機から活動（それもボランティアという活動）に入った人は長続きしないという仮説もなりたつ。

ALの場合も筆者の知人の活動家と似た経過をたどったようだ。本稿では割愛したが、彼はインタビューのなかでおびただしい数の在豪ブラジル人の名前を口にした。総領事のような公人からエ

<sup>5</sup> プッシュ要因とは移民の送り出し国側の要因。移民がクニを出ていく事情。その多くが貧困や身の危険などである。いっぽうプル要因とは受入国側の要因のこと。受け入れ側が移民を必要とする事情。多くが労働力不足だが、近年は難民受け入れなど人道的な要因もみられる。

ンタテナーまで多種多様な人びとである。もし映画祭を主催しなければ、これだけ多くの在豪ブラジル人と知り合うこともなかったし、親しく付き合うこともなかっただろう。さまざまな種類のカポエイラについて熱心に語ってくれたが、注目すべきは、その多数の道場の場所まで正確に教えてくれたことだ。コミュニティの人びととの交流が表面的ではなかったことを物語っている。

RQ3 主催者としてホスト社会（オーストラリア）や在豪ブラジル人社会とどのような関係を築いたか。

上記のように、彼はオーストラリアで、映画祭開催を通じて多くのブラジル人との交流を経験することになる。ホスト社会との関係では、第1に劇場経営者との交際が重要であった。映画祭のための「容れもの」（劇場）を確保しなければならないし、利益率の交渉をしなければならないからだ。オーストラリアの主要都市で有名な劇場と毎年契約するためにはしたたかな交渉力を必要とするが、なんといっても観客が入らないことには続けていけない。劇場側も採算割れの仕事は受けたくないからだ。

ホスト社会との関係の第2は、主流メディアとの交流である。できれば記事として取り上げてもらわなければならない。すなわち、パブリシティの活発な展開である。しかし大手のメディアはいつも無料で掲載してくれるとは限らない。エンタテインメントに強いメディアですら、割引とはいえ、広告料を要求することがあった。利益の少ない事業であるからこうした費用の捻出は厳しいものがあつた。ただ、エスニック・マイノリティのための公共放送局であるSBS（Special Broadcasting Service）は、しばしば好意的に取り上げてくれたという。

エスニック・コミュニティ、すなわち在豪ブラジル人社会とは、上記のごとくかなり多くの、多様な人びとと交流した。また、エスニック・メディア、すなわち在豪ブラジル人を対象とするメディアは大小を問わず、ALらの情報持ち込みは歓迎した。エスニック・メディアの側も同胞関連の大きなネタを欲しているからだ。

有料、無料にかかわらず、イベントの主催者にとってインターネットの発達、とくにスマートフォンを代表とする携帯端末の急激な普及は見逃ごせない問題だ。インターネットやスマホはまさに両刃の剣である。インターネットの普及により、主流メディアもエスニック・メディアも規模が縮小している。エスニック・メディア、とくに印刷媒体は撤退が続いた。インターネットを通じた宣伝を試みても、ネットコミュニティは気まぐれである。主流メディアやエスニック・メディアに取り上げられると、大なり小なり「話題のフォーラム」が形成される。エンタテインメントや文化情報の公共圏といってもよい。それがインターネットは情報を出すのは簡単だが気まぐれすぎてまともな公共圏が形成されにくいし、あてにならない。

ホスト社会、在豪ブラジル人社会とも重層的な関係を築いてきたALだが、しだいに疲労の色が滲むようになった。

RQ4 ディアスポラ・エージェントの語りから読み取れるディアスポラ意識はどのようなものか。

オーストラリア移住選択の経緯に関するALの語りからは、ほんの少しの深刻さも感じられない。就職先の選択と変わらぬほどの重さでしかないようないかたである。彼のような移動のしかたは特殊であろうか。国境を超える移動者のなかには、出自国において高学歴であったり、専門職とし

て働いていたものも少なくない。そうした人びとでも新天地では未熟練労働者として扱われることが一般的である。現に、在日ブラジル人の工場労働者のなかにも大卒は少なくない。在豪ブラジル人のなかにもブラジルで歯科医だった人がオーストラリアに渡ってしばらくはホテルでベッドメイキングをしていた例もある。むろん、出自国においてミドルクラス以下の人は新天地においては最下層もしくはそれに近い階層から出発せざるを得ない。ALのいう第1の波でブラジルを離れた移民の多くがこの階層となった。ところが、なかには「ミドルクラス移動」（出自国でも移動先でもミドルクラスもしくはそれ以上の職に就く）をするものもいる。そうした違いはどこから来るか。その答えの一端がこのALの語りから読み取れる。彼の語るエピソードは、ホスト社会でも評価される高い学歴、それも最高の学歴を有しているという必要条件に加え、ホスト社会の言語が流暢であるという十分条件を備えた移動者の物語であるといえよう。ALのような移動の仕方をする移動者は単なる移民ではない。条件さえ折り合えばまた国際移動、それも「ミドルクラス移動」を繰り返す可能性がある。彼らこそが越境移動者 (transnational migrator) と呼ぶにふさわしい人びとである。ALのいう第2の波の移動者である。そして彼らのディアスポラ意識はミドルクラス以下のディアスポラとは異なる相とならざるを得ないだろう。要するに、ALらには常識を超えるほどの国際移動のためのレディネス (準備性) が備わっているという意味で、移動先での身分、地位が比較的保障されている人びとである。この準備性を別の言葉でいえばアカルチュレーションがすでに進行している状態である。アカルチュレーションは一般に新天地で主流文化に揉まれながら進行するものだが、ある程度共通の文化域 (アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなど) では、同じようなアカルチュレーションが進行すると思われる。

かれらのこうした「安全性」がかれらの意識や行動を「選択的」で「自由度の高い」ものにしてしている。どちらにも属しているともいえるし、どちらにも属していないともいえる存在だ。ブラジル人だがブラジルには住んでいないし、もう住む気もない。ブラジルは旅行で、好きな時に行けばいい。ブラジルの食べ物、そのも「本物」が食べたければオーストラリアにあるブラジル人経営のレストランをつぶさに調べればよい。彼らは「選択」する権利をもっているし、それを楽しんでいる。それができるのも、現住国であるオーストラリアの暮らしにかなりの程度満足しているからである。ブラジル人ディアスポラについて彼は「ブラジルという国の問題に付き合う必要はない」存在であると表現した。まことに象徴的で、言い得て妙というほかない。

ディアスポラは、身の置き方もそうであるが、出自国と現住国に対する愛慕やアイデンティティという点でも、マージナルな存在であるのが一般的である。この場合のマージナルな存在とは、文化的境界人という意味である。すなわち、出自国と現住国の狭間で、その愛慕やアイデンティティが揺れ動く人びとである。ALの場合、マージナルといっても、そのスタンスは、かなりオーストラリア寄りであるといえよう。

ALは2回目のインタビューの最後に衝撃的な事実を告げた。2013年の第4回以後ブラジル映画祭を開催していないという。この事業から手を引く可能性が高いともいうのである。その理由として、収支を合わせるのが難しくなった、とだけ語った。それが直接的な理由だとしても、間接的にはさまざまな理由が考えられる。費用面でいえば、たとえばアメリカのニューヨークやフロリダのブラジル映画祭にはブラジル政府から数千万円の援助があるが、オーストラリアの映画祭には百万円未満の援助しかないという。たしかに居住ブラジル人の人口が違うとはいえ、同じようなブラジル文

化の宣伝活動をしている身としてはどうしても彼我の違いを感じてしまうだろう。こうしたなか、モチベーションを維持するのは難しいに違いない。

さらに、新興移民国であるオーストラリアは、毎月のようにエスニック・イベントが開催される。さまざまな国の映画祭(日本映画祭もある)はもちろん、多様な民族祭が行われる。加えて、映画では、ラテンアメリカ映画祭も近年規模を拡大してきている。ホスト社会の人びとにとっては似たようなものであろう。わざわざブラジル映画だけのために狙い撃ちして映画館に足を運ぶ人は多くないに違いない。このように、ALらの事業には夥しい数と種類のライバルが存在するのである。それでも彼が、それこそ火の出るような「愛国心」に裏打ちされたディアスポラであったら、石にかじりついてでもこの事業を続けたかもしれない。しかし彼は「ミドルクラス移動」が可能な、越境移動者(transnational migrator)つまり第2の波の代表のような存在である。そういえば、日本におけるブラジル映画祭の重鎮の一人も、その後ブラジルに帰国してしまった。

また、彼を夢中にさせる人間関係の「好循環」も次第に色褪せていったのかもしれない。先に、筆者は、人間関係の好循環が生まれないと消極的な動機からボランティア活動に入った人は長続きしないという仮説を立てたが、ALの場合もそういう状態になった可能性はある。

もっと穿って考えれば、エスニック・コミュニティの人間関係よりもっと彼を夢中にさせる関係が生じたからかもしれない。ALは数年前に再婚した。ALの話によれば、相手はブラジル出身の女性で、オーストラリアでの地位上昇を目指してシドニーの大学院に入ったという。クラスCの移住者である。ブラジルに見切りをつけてオーストラリアにやっただけあって、さほどホームシックを感じているようにはみえないというが、それでも彼女は時折、珍しいブラジル料理をつくってくれたりする。むろんブラジルの政治や文化状況についての話題にも乗ってくれる。それも、ブラジルが恋しい、という類の話ではない。遠くでブラジルを話題にしておしゃべりを楽しむという感じなのだ。もともと、育ったサンパウロには何の未練もないといていたALである。彼にとって、今や、ブラジルは「すぐそば」にある。ブラジルとの関係は、いまのところ、彼女との関係で十分なのかもしれない。

## 6. おわりに—ALの位置づけ

ALの分析が終わったところで、彼の位置づけを試みたい。いうまでもなく、事例研究(ケーススタディ)は当面「個」の追究に全力を尽くすが、長期的な心構えとしては一般化、理論化を目指している。「個」であるALの事例から一般化へつながる道筋を探したい。

先に筆者はディアスポラはマージナルな存在であると述べた。そして、ALのスタンスはかなりオーストラリア寄りであると判断した。つまりALは現住国寄りである。他のディアスポラ・エージェントと比較してそのように判断したのである。筆者はこれまでディアスポラ・エージェントとのインタビューを20年あまり続けてきた。当然ながら、ディアスポラと一口にいっても一枚岩ではない。これまでの筆者の調査研究をもとにマージナルな存在であるディアスポラ・エージェントの理念型を仮説的に提出してみよう。一般化へとつなげる道筋の一つとしての理念型である(図3, 4, 5)。

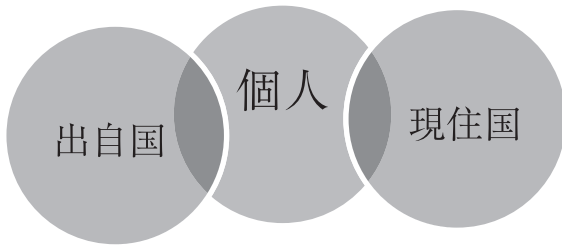


図3 均等型ディアスポラ・エージェント

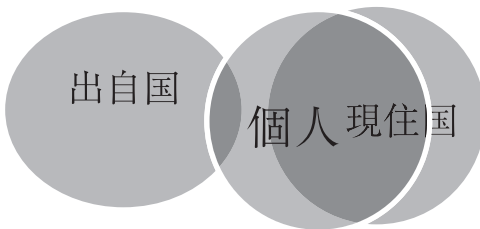


図4 現住国型ディアスポラ・エージェント

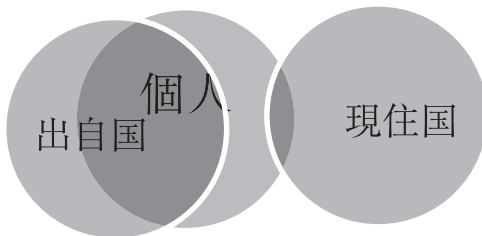


図5 出自国型ディアスポラ・エージェント

図3の均等型は現住国に対する愛慕と出自国に対する愛慕(エスニック・アイデンティティを含む)が拮抗しているタイプである。

図4の現住国型はどちらかといえば、その愛慕が現住国のほうに強くあるタイプである。

図5の出自国型はどちらかといえば、その愛慕が出自国のほうに強くあるタイプである。

あくまで理想型であるから図3の均等型もつくってみたが、現実にはあまり多くないと思われる。筆者は、ALに初めて会ってしばらくはこのタイプかと思っていたが、しだいにそうではないということがわかった。前述のように、ALは、今のところ、典型的な現住国型であると考えられる。

筆者がこれまで交流してきたディアスポラ・エージェントのなかには、世界の沖縄系に関する手書き新聞(日本語)を30年以上にわたって発行し続けるロサンジェルスTKのように、出自国(彼の場合は沖縄)に強い愛慕の念を見せる人も少なくない。彼の月刊新聞は全面、世界(主にハワイ本土、南米、そして日本や沖縄県)の沖縄系団体等の定例、臨時の行事等の諸活動報告やウチナー



ンチュの受賞、重要選挙当選等の誉望にかかわる出来事が紹介される各地の新聞やニューズレターの切り抜きで埋め尽くされている。TKは出自国型の典型であると思われる。

TKがなぜこのタイプのディアスポラ・エージェントになったかを推察するために若干彼のプロフィールをひも解いてみよう。TKは帰米二世である。したがって生まれながらの米国市民だが、ハワイで生まれ幼少時に親の故郷である沖縄の親戚もとに渡り、高等小学校を終えてからアメリカに戻ってきた。言語社会的には、母語（沖縄語や日本語）が形成されてからの「帰国」ということになる。戦時中は日系人強制収容所に収監された。すでに90歳を越えているTKはむろん20年以上も前にリタイアしているが、戦前戦後と一貫してアメリカで労働者として誠実に生きてきた。そのことを誇りにしている。妻も帰米二世である。両者とも幼少年期に日本人としての誇りを叩き込まれた世代だ。その子供たち（三世）はいずれも大卒で、なかでも娘はアメリカの有名大学でPh.D.を取得し、大学教授となっている。TKの場合、軽々と国を越えてミドルクラス移動できるような立場になかった。アメリカで営々と労働に励むしかなかった。彼の心の支えは沖縄人としての矜持である。TKは、善良なるアメリカ市民としての誇りももっているが、その愛慕の方向は、どちらかといえば、出自国寄りといえよう。

ディアスポラ・エージェントは、エスニック・アイデンティティにかかわるエージェントであるから単なるディアスポラとは異なり、大なり小なり出自国との関係をもっているし愛慕の情もある。しかし、その愛慕の情の奥底にあるものにふれてみると、そのスタンスに相対的な違いが見えてくる。そしてその違いを仮説的にいえば、本人のもって生まれた素質もさることながら、家庭を中心とした第一次集団における境遇や初等教育の質、長じて遭遇する第二次集団における社会経験や高等教育歴の有無や質などから織りなされる資質によるところが大きいといってよいだろう。

## 参考文献

- 小内透編（2010a）「在日ブラジル人の教育と保育の変容」（講座 トランスナショナルな移動と定住一定住化する在日ブラジル人と地域社会）御茶の水書房
- 小内透編（2010b）「ブラジルにおけるデカセギの影響」（講座 トランスナショナルな移動と定住一定住化する在日ブラジル人と地域社会）御茶の水書房
- Rocha, C. and Manuel Vasquez (2013), *The Diaspora of Brazilian Religions*. Leiden: Brill.
- 白水繁彦（1993a）「ハワイ日系社会の文化変化：第二次大戦と米化運動」『コミュニケーション紀要』7号
- 白水繁彦（1993b）「ハワイ日系二世の戦争協力」『移住研究』30号
- 白水繁彦（1998）「エスニック・アイデンティティの覚醒運動」『武蔵大学総合研究所紀要』No.7
- Shiramizu, Shigehiko. (2000) Global Migration, Ethnic Media and Ethnic Identity, *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol.9, No.3, pp.273-285
- 白水繁彦（2004a）「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承」『移民研究年報』第10号, pp.21-42
- 白水繁彦（2004b）『エスニック・メディア研究』明石書店
- 白水繁彦（2006）「ウチナンチュ・スピリットのゆくえ —エスニシティで繋がる世界」『コミュニケーション科学』（東京経済大学）24号
- 白水繁彦（2007）「フェスティバル、フード、そしてアイデンティティ～ハワイにおける「沖縄料理」の政治学序説～」『武蔵大学総合研究所紀要』No.16, pp.43-63
- 白水繁彦（2008a）「移民周年祭研究序説-ハワイ日系百年祭の事例から」『移民研究年報』第15号, pp.27-49

- 白水繁彦編 (2008b) 『移動する人びと、変容する文化』 御茶の水書房
- 白水繁彦 (2008c) 「コミュニティ・ジャーナリストの志向と役割 –ディアスポラ変容エージェントのメディアグラフィアー」 『ソシオロジスト』 (武蔵大学社会学会) No.10
- 白水繁彦 (2011a) 「橋を架ける人びと」 日本移民学会編 『移民研究と多文化共生』 御茶の水書房
- 白水繁彦 (2011b) 『多文化社会ハワイのリアリティー』 御茶の水書房
- Shiramizu, Shigehiko (2013) The Creation of Ethnicity: Hawaii's Okinawan Community, *Japan Social Innovation Journal*, Vol.3, No.1. pp.19-35
- 白水繁彦 (2015) 「在日外国人とメディア～ブラジル人架橋アクターの語りとメディアのあり方～」 『Journal of Global Media Studies』 No.15. pp.1-18.
- 白水繁彦 (2016) 「女性が「自立」するということーライフストーリーから読み解く高学歴女性の適応のストラテジーー」 『Journal of Global Media Studies』 No.17/18. pp.55 -67.
- 白水繁彦・佐藤万里江 (2006) 「エスニック・コミュニティのリーダーシップ～ハワイ沖縄系社会にみるエスニック文化主義の普及活動～」 『武蔵大学総合研究所紀要』 No.15、pp.133-151
- 渡辺雅子編 (1995) 『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人<上>論文篇・就労と生活』 明石書店

ウェブサイト

- オーストラリア 第3回ブラジル・フィルム・フェスティバル 2016年2月2日閲覧  
<http://www.jarjouradesign.com.au/projects/brazil-film-festival-2011/>
- オーストラリア 第4回ブラジル・フィルム・フェスティバル 2016年2月2日閲覧  
<https://www.facebook.com/BrazilFilmFestival/>
- 海外日系人協会 2016年6月10日閲覧  
<http://www.jadesas.or.jp/>
- 国際協力機構 事業・プロジェクト 2016年6月10日閲覧  
<http://www.jica.go.jp/activities/index.html>
- イシ-アンジェロ The Japanese-Brazilian community in Japan and the "Brazilian diaspora" in the world 2016年5月6日閲覧  
[http://www.fapesp.br/japanbrazilsymposium/pdf/1-3\\_Ishi.pdf](http://www.fapesp.br/japanbrazilsymposium/pdf/1-3_Ishi.pdf)